

詩 作

定年を1～2年先に迎えた頃、関東のどこかの市が「駅」という題での詩作を募集しているのを知り応募した作品です。国語の教科書で有名な新川和江が選考委員をつとめる募集でした。残念ながら、入賞すらかすりませんでした。掲載します。

故郷の駅

雨が降り出した

電車を降りた客達は 空を見つめ

駆け出す人 傘をひろげる人

迎えを待つ人など 秋の夕暮れだった

50年昔の阪急神戸 西灘駅

少年は改札口で母を待っていた

次の電車 新しい乗客が迎えの者と合流し

古い造りの駅を後にする

母親の出迎いで 楽しそうに帰る子供の姿

木造の駅舎にぼんやり灯りがともる

雨はやまず 母はまだ来ない

近くの家々から 魚を焼くような夕飯の匂い

次の電車もその次も

雨はやまず 母は来ない

少年は途方にくれた

雨がやんだ

仕方なく とぼとぼと傘を二本持って

駅を後にした

少年は迎えを待っていたのではない

働きに出ている母を気づかって

迎えに来ていたのである

雨ならば 早く帰るかも知れないと思い

家に帰り 中学生の姉が作ってくれていた

冷めた夕飯を口にしたら みんな無口だった

その日も 母の帰りは遅かった

そして50年 母は亡く

私は奈良で暮らしている

教員生活の定年を間近にひかえ

妻と娘の三人でかこむ食卓はあたたかい

鍋からあがる湯気と香り 一杯のビール

つつましいけれど 私にはご馳走だ

故郷の駅で少年が思いえがいた夢は

どんなだっただろうか